

# 庭野平和財団 活動助成 最終報告書

1. 申請団体：財団法人アジア保健研修財団（AHI）

2. 事業名称（コード番号 08-A-246）

フィリピン・ミンダナオのムスリムの人たちと平和を作りだすー 草の根での対話・開発・健康の取り組みと日本の私たち

3. 活動目的(立案にいたる動機を含む)

当団体は、1998年度から2007年度までJICAからの委託研修事業実施を通して、フィリピン、ミンダナオ・ムスリム自治区とつながりを持ってきました。クリスチャンが大多数のフィリピンにおいて、同地域のムスリムの人たちが長年抑圧的な状況に置かれ、また反政府勢力弾圧をはかる政府軍と武装闘争を続けるイスラム勢力の間で平和に暮らすことがままならない状況がありました。2001年の「9・11」以降はテロ対策のもと、援助事業を伴い国際的な関心が高まりました。

JICA研修に参加した同自治区の保健行政官の実践を知る中で、日常的に住民参加の保健活動を続けていくことが人々のつながりを強め、健康な地域づくり、ひいては、平和な社会を生み出す道りであることにあらためて気付きました。さらに、このような取り組みを日本の人たちと共有することを通して、表面上平和が保たれつつも、市民生活において様々な側面で「排除」の論理が働く日本の私たちの足元を見つめ直したいと考えました。

以上から、2006年度当団体主催の研修に参加した、フィリピン、バシラン州にあるNGOの代表であるデデットさんを招き、日本国内各地で講演会やワークショップを行うことを企画しました。彼らは、「草の人たちこそ平和を成す基盤」と考え、保健活動や生活向上の取り組みなど、日常的生活向上の活動を通して、立場が異なる人たちの間で理解と協働を生み出そうとしています。彼女を講師として、来る11月9日から11月30日まで、愛知、広島、京都、東京などを巡回する計画を立てました。

彼女の団体が、地域の人々が生きる力を身につけることを支援し、一方、どのように行政や国際機関への提言を行っているかを聞くと同時に、彼女自身、クリスチャンとしてのアイデンティティを持ちながら、ムスリムの人たちとどのように共に働いてきたか、そのコミットメントからも学びたいと思いました。過去9年間「ミンダナオ平和セミナー」のファシリテーターとしての豊富な経験もあるので、受け入れ団体と相談しながら、参加型ワークショップも計画しました。

(注) ミンダナオ平和セミナー：Mindanao Peace Institute

カトリック系のNGOおよびミンダナオ島ダバオ市に拠点を置く他のNGOによって、2000年以降毎年開催され、フィリピン以外のアジアのみならず、北米、南米、ヨーロッパからも参加がある。

以下の項目を活動目的としてあげました。

<短期目標>

- 1) 参加者が報道されることの少ない現地の状況を知る。
- 2) 参加者が「平和」の課題を身近な状況においてとらえ直し、自分の問題として受け止める。

<長期目標>

- 3) 講師自身、日本の人たちとの交流を通して、自分の活動をより広い視野において位置づける機会となる。また、広島などで、日本の平和の取り組みからも学び、帰国後、NGOの活動に役立てる。
- 4) 今回訪問をした団体、グループの関係者がアジア保健研修所を通して、講師や講師の団体とつながりを持ち、直接現地を訪問したり、「平和」との関連において学習活動を継続する。

## 4. 活動の内容と方法

以下にもあるように、当初計画した講師のデデットさん 1 名招聘にあたり、彼女が責任者である NGO-Nagdilaab Foundation Inc. の関係者 2 名がイスラム過激派に誘拐される事件が起きました。ミンダナオのバシランという紛争地域で、草の根のモロ（イスラム系住民）の人々と信頼関係を気づきながら開発活動に深く関わる NGO として、今まで経験したことのない事件でした。この人質事件が解決されるのを 10 月中旬まで待つ決断をしましたが、期限になっても解放されませんでしたので、第二候補のナプサさんの招聘準備を進めました。10 月末に一人が解放されたのを受けて、再度、デデットさんに来日の可能性を打診したところ、理事長の許可も出たのですが、当初計画の 3 週間ではなく、前半の 2 週間が可能との返事でした。このことを AHI 事務局の中で話し合った結果、前半の 2 週間でデデットさんが主として担当し、後半の 2 週間でナプサさんも合流することで、この事業を進めることになりました。

<実施スケジュールの概要>

準備段階：

2008 年 4 月～7 月 受け入れ団体募集；

2008 年 6 月 10-11 日 現地訪問と打ち合わせ

2008 年 9 月上旬 VISA など招聘書類の送付(デデットさんへ)

2008 年 9 月 15 日 デデットさんの団体職員、関係者 2 名が、バシラン州にてイスラム過激派に誘拐される。

2008 年 10 月中旬 2 人の人質が解放されない状況下で、第二候補のナプサさんに連絡を始

める。

2008年10月下旬 VISA など招聘書類をナプサさんへ送付

2008年10月30日 デデットさんの団体の職員が解放される。

2008年10月下旬—11月初旬 各会合の関係者へのお知らせ、プレスリリース

2008年11月10日デデットさん来日

2008年11月12日 — 23日 デデットさん各地における会合実施 (24日帰国)

2008年11月16日 ナプサさん来日、以後、30日まで各地における会合実施

実施段階

日程		午前	午後	夜
11月10日	月			デデット来日
11月11日	火	AHI 打ち合わせ	AHI 打ち合わせ	
11月12日	水	金城学院高等学校集会		
11月13日	木			京都 YWCA-AHI 共催講演とワークショップ
11月14日	金	平和記念公園訪問	広島市立大学講義	被爆者との対話
11月15日	土		ANT-Hiroshima 講演	
11月16日	日	甲山教会礼拝	三次教会婦人会講演会	ナプサ来日
11月17日	月	AHIにて中間評価	首都圏訪問計画	
11月18日	火		JOICEP-AHI 共催講演	
11月19日	水	恵泉女学園大学講義	女子学院中学校講演	
11月20日	木	東京 YWCA 福祉専門学校	信濃町教会講演	
11月21日	金		国際基督教大学訪問	JOCS-AHI 共催講演会
11月22日	土	さいたま市民活動センター講演	東京フィリピン研究会講演	KAFIN訪問(西川口)
11月23日	日	聖オルバン教会礼拝	高輪教会講演会	
11月24日	月	デデット帰国	Smile(多文化共生サークル)ワークショップ	
11月25日	火	評価と計画		
11月26日	水		滋賀大学講義	
11月27日	木		名古屋友の会講演	ぶどうの会(近隣施設職員 の会)講演
11月28日	金	市が洞小学校(合同授業)	中京大学(講義とワークショップ)	日進市男女参画事業 - 講演
11月29日	土	多治見市国際交流協会講演	名古屋 YWCA-AHI 共催講演	

11月30日	日	平針教会後援	南山教会講演	ナプサ東京へ
--------	---	--------	--------	--------

<方法>

**講義** — パワーポイントによる現地や人々の状況、本人の生き方、団体のとりくみ、課題(平和、開発、健康に焦点をあてて)や、日本社会、参加者へ向けたメッセージを伝えた。のち、質疑応答の時間を確保した。また、茶話会など時間のとれるところでは、意識して参加者との交流の時間をもった。なお、JOICEP、フィリピン研究会、女子学院中学校では、通訳を介さず、英語で講義をおこなった。

**ワークショップ** — 小グループに分かれて、プレゼンテーションの中身を深め、日本社会の状況など自分たちにとっての平和の意味や、平和にむけてのアクション、役割をさぐり、また、全体にも共有するワークショップをもった。(多文化共生サークル、中京大学、名古屋YWCA、京都YWCAなど)

**礼拝** — キリスト教会における礼拝のメッセージという形で、自分の生い立ち、平和に取り組む動機、実際の活動、課題などを紹介した。(甲山教会、聖オルバン教会など)

**訪問** — フィリピン人講師(AHI元研修生)にとっての学びとして、広島における記念公園、平和資料館訪問、被爆者との対話、国際基督教大学教授リベラ氏(フィリピン人)との対話、KAFIN(フィリピン人コミュニティの人権問題に取り組むNPO)訪問などによって、講師たちの平和や日本社会の課題について視野を広げる機会をもった。

<講師の講義内容概要> (詳細は別添資料2、3参照)

#### 1) デデットさん

AHI研修生(2006年国際研修参加)のデデットさん(クリスチャン、女性49歳)

両親は、ミンダナオ以外の地域から移住してきたクリスチャンだったが、本人はバシランで生まれ育った。マルコス大統領の戒厳令下で、内戦が激化、学校閉鎖のため両親と離れ離れになってマニラで高校、大学と学ばざるを得なかったが、クリスチャンワーカーとしてバシランにもどり、ムスリムの人々のためにも社会活動を始めた。住民参加とエンパワーメントと地方行政との連携によって、グッドガバナンスを実現し、平和と地域づくりに貢献するNGOを設立し、責任者となる。現在、教育、生活改善、保健、環境、平和活動をバシランで進める。

クリスチャン、ムスリムの垣根を越えて、地域づくりを進める働きが評価されて、2006年にはフィリピンにおけるノーベル平和賞候補になる。また、国際的な平和活動家研修を進めるミンダナオ平和セミナーのコーディネーターを10年勤める。

このような平和・開発活動における豊かな経験と、信仰に根ざした献身的な働きから、ミンダナオの現状を伝え、日本の参加者が平和について考え、自分を振り返る機会を提供した。

特筆すべきは、9月15日に二人の職員がイスラム過激派に誘拐された中、来日が危ぶまれていたが、本人もAHIも希望を捨てずに、また、参加団体もほとんどが理解を示し、

忍耐強く、彼女の来日を待ってこの報告会が実現した。そこには、まさに、遠いミンダナオの紛争が直接的に日本の私たちに影響を及ぼし、共にその苦しみや悩みを共有する過程があった。彼女の講義には、団体の責任者として人質解放の交渉プロセス、それを乗り越えるまでの葛藤、乗り越えたあと、それでもムスリムの人々のところで働くという献身の深まりを分かち合うという迫力のあるものであった。

メッセージに置いても、「自分から始まる平和」こそが「外なる平和」につながるということが、説得力をもって参加者に受け止められたことは、アンケート結果などからも伺える。

## 2) ナプサさん

AHI 研修生（2004年国際研修、東洋医学研修参加）のナプサさん（ムスリム、女性、36歳）を迎え、今年8月以降、フィリピン・ミンダナオ本島における内戦の激化した状況、その背景、そこにおけるナプサさん、そのNGOの平和、健康の取り組みについて語られた。

2001年9月11日以降、アメリカの「テロとの戦い」の宣言後、ただでさえ、他の地域の国民に差別されてきたモロ（イスラム教化したフィリピン人）の人たちへの偏見や差別が深まった。政府軍の軍事作戦後に、モロの人々が、先祖伝来の土地から、追われ、開発の名の下に、アメリカやマニラ資本などのプランテーション、鉱山開発会社、石油採掘会社などにその土地が、奪われる状況がある。その背後には合同軍事演習の名の下に、アメリカ軍が必ず行動を共にしている。

そのような状況で、医療保健サービスの届かない僻地で暮らすモロ、先住民、貧しいクリスチャンの人々に、保健・医療、平和の啓蒙活動などを進めているのがナプサさんのNGO、パササンバオ総合保健サービスである。始まりは、内戦で夫を失った未亡人たちの女性組織、モロ女性センターであったが、2000年エストラダ大統領によるMILF(モロイスラム解放戦線)本部への総攻撃による多数の避難民が生じたこともうけて、保健サービス活動を中心とするこのNGOが、プロテスタント教会などの支援を得て誕生した。子どもと女性の健康に焦点をあて、母親を保健ワーカーとして研修し、薬草、鍼などの伝統療法も活用した、移動診療活動（避難センターなど）、7村における村人運営薬局、収入向上活動、平和教育活動を進めている。資金不足と人材不足で活動の持続が課題としてある。AHIの研修では、皮内鍼を学び、長い中国鍼と合わせて治療を進め、国際研修で学んだ地域の行政や様々な機関、NGOに働きかけ、連携していくことで効果をあげていることがあげられた。

自身も内戦の犠牲者であり、自らが属するモロの人々の声なき声を代弁し、人権が平和の基礎であるなど、迫力のあるメッセージを書く集会で、伝えていた。

## 5. 活動の成果（別添資料1.「各集会の特徴、成果、課題」参照）

資料1にもあるように、27団体の受入で参加者総数2165名であった。そこには、AHIならではの平和が語られた。それは、コミュニティ、生活に根ざした、実践に裏打ちされたメッセージであり、「アジアの最も小さい兄弟に焦点をあて、人づくりを進め、声なき声を人から人へ伝える」というAHIの理念に通じる独自のものが打ち出せたと考えている。

次に目的に照らして、成果を見てみたい。

まず、1) 参加者が報道されることの少ない現地の状況を知る、に関しては、当初の予定と異なり、クリスチャンで移民の第二世代、ミンダナオ島嶼部で働くデデットさんと、ムスリムで内戦の犠牲者でもあり、ミンダナオ内陸部で働くナプサさん、二つの違う立場のNGOワーカーを招き、多角的にミンダナオの平和についての問題を共有する機会となった。特に、実際に二人が講師となって関わった首都圏集会（11月18日～23日）で成果が見られた。また、参加者と講師の意見交換によって学びが深まったことも伺える。

資料1から以下に、引用する。

「ナプサさんからのお話だけでなく、デデットさん側からの見方が提示されたことで、話に深みが増した」（JOICEP集会参加者）

「キリスト教とイスラム教という違う宗教を信じる二人が同じ目的に向かって活動していることに感動した」（女子学院生徒）

「彼女たちが語らなければ、誰も知りえなかったことを知った」（女子学院生徒）

「デデットの平和とナプサの保健がうまく調和」（JOCS集会担当のAHI職員）

「実際に活動している方のお話、言葉に重みがあると感じた」（信濃町教会参加者）

「何世代にもわたって紛争が長引く中で、少数民族として貧困に生きるということの意味が良く理解され、そのような中での健康づくりをすすめるということの意味もよく理解された。」（名古屋友の会担当のAHI職員）

「質問の時間では、年配の女性の方からの日本の戦争犯罪のことを聞き、日本人との関わりをよく知らなかったのが、よかった。」（日進市男女参画事業参加者）

2) 参加者が「平和」の課題を身近な状況においてとらえ直し、自分の問題として受け止める。デデットのクリスチャンとして、誘拐事件を乗り越えてムスリムに働きかける姿勢や、「内なる平和」がまずあって「外なる平和」が作り出せるというメッセージが参加者に平和の理解を進め、振り返る機会となった。また、ナプサの内戦犠牲者、社会的差別される当事者として人権意識からの「健康と平和」の取り組みからのメッセージは、平和について説得力をもって参加者に考えさせた。また、日本の参加者が遠いフィリピンの問題でなく、日本の中にある平和の課題にひきつけようと、二人とも各集会で意図して講演や

ワークショップをファシリテートしたことが、この成果につながったと考える。二人の人格に触れ、学んだからこそ、知的レベルを超えて、自分の問題として受け止めることが可能になったのではないかと考える。以下に参加者などの声を引用する。(参照資料1)

「平和は一人じゃ作るのは大変だけど、みんなが協力すればできる」「簡単なことでもいから小さなことをこつこつとやっていきたい」「愛は壊れやすい。努力して愛を与えるようになりたい」(以上、金城学院高校生徒)

「自分の平和、自分は誰なのか、神は？自分に問いかけてみたい」「自分も困難の中にも、他の人と関わって、平和を伝えようとするその優しさ、それがデデットさんの言う、自分の平和だと思う」(ANT-Hiroshima 集会参加者)

「信仰や文化、様々な違いを越えていこうとする努力、平和は自分自身から始まることを学んだ」(三次教会参加者)

「自分の中の平和が訪れたとき、人はナプサさんやデデットさんのようにどんな状況でも明るくいられるのだ」(女子学院生徒)

「他人のために人生を捧げられる人たちは、その人たちの中から平和が始まっている」(女子学院生徒)

「ナプサさんが私たちに訴えかけた『あなたたちは恵まれているのだから他の人たちのためにも何かをしてほしい』という言葉は、今まで聞いた言葉の中で一番重かった」(女子学院生徒)

「私には理解し行動する時間と環境があることに感謝」(女子学院生徒)

「考えを行動で示している二人に強い憧れを感じた」(女子学院生徒)

「私自身、国語の授業で様々な視点からの戦争教材を使ったり、生徒に戦争体験の聞き書き作文を書かせるにあたり、平和について学ぼうとし、考え続けてきた中で、自分なりの確信や、平和に関わる一人としての自意識が少しずつ少しずつ積み重なってくるのを感じていた折、デデットさんの”Peace begins in me”という言葉に、自分が目指すひとつの目標を得ることができ、とても大きな出会いとなりました。」(女子学院教師)

「今、日本の社会福祉に目を向けていることが、何かにつながる。現状から目を背けず、皆で平和について考えていけるよう、自分に出来ることを見つけたい」(東京YWCA学生)

「平和・開発・健康」をキーワードとして、平和を伴わない開発や、開発を伴わない平和はなく、その土台には人権が保証されていることが必須であること、そのようなプロセスの中にこそ【健康】が宿るのだとのメッセージはわかりやすく、よく理解された。(Smile 担当AHI職員)

「参加者にとっては、近隣の国の抱える問題を知るとともに、バナナの輸入や米軍の派遣など日本とその問題が無縁ではないこと、また日本の医療現場にとってもナプサさんの取り組みから学ぶべき点があることなど、さまざまな気づきを与えられる貴重な機会となった。」(滋賀大学中野教授)

「自分と同年代の子どもたちが今直面している状況を知る。それに対し、どのようによりそえるか、自分が何ができるかを考える機会となった。」(長久手町立市が洞小学校担当の AHI 職員)

#### <長期目標>

3) 講師自身、日本の人たちとの交流を通して、自分の活動をより広い視野において位置づける機会となる。また、広島などで、日本の平和の取り組みからも学び、帰国後、NGO の活動に役立てる。

デデットさんは、2006年10月に巡回報告会講師として広島、大阪、愛知への訪問を予定したが、直前で家族に不幸があり、キャンセルせざるを得なかった。紛争地帯であるバシランで平和・開発活動を進め、ミンダナオ平和セミナーという国際平和活動家研修コースのコーディネーターを務める彼女にとって、今回の広島訪問は2年越しの夢の実現であった。ANT-Hiroshima のアレンジで、経験ある英語の通訳ガイドに半日かけて平和公園・平和記念資料館を案内いただいたり、被爆者の方と対話することで「今回の広島訪問は自分にとっての聖地巡礼だ」と述べるまでになった。今後、現場に帰り、平和についての教育や政策提言活動をするときに、広島からの「核不拡散」のメッセージを広島の T シャツを着て訴えたいと述べた。

ナプサさんにとっては、自分の団体、パササンバオ保健総合サービスをサポートしてくれている「(特活) ビラーンの医療と自立を支える会」の関係者も参加した東京における JOICEP や東京フィリピン研究会において、デデットさんからのプレゼンや、参加者との討論によって、より客観的に自身の活動を振り返る機会が与えられた。また、普段、ほとんど機会のない教会への出席を通して、日本のキリスト教会の人々の暖かさ、関心の高さに触れ、帰国後もさらにキリスト教会との連携をとって、保健、平和活動に関わるようになることが期待される。

AHI としてさらに、今後、長期に亘ってこの二人の AHI 元研修生たちをフォローし、サポートしていきたいと考えている。

4) 今回訪問をした団体、グループの関係者がアジア保健研修所を通して、講師や講師の団体とつながりを持ち、直接現地を訪問したり、「平和」との関連において学習活動を継続する。今回訪問を受け入れてくれた 27 団体と、さらに相互強めあいの関係を深めて行きたい。また、デデットさん、ナプサさんの団体とのつながりを持続的なものにしたい。資料 1 からの引用をする。

「デデットさんの素晴らしいお人柄と、信仰、そしてその努力を知った。何も包み隠さず自らの葛藤までも教えてくださったデデットさんに感謝。私の心が彼女とともにあることを、強く感じている」(広島市立大学 湯浅教授)



「これからもANTと、中島様やAHI、デデットさんとそのNGO、互いに協力し合い学びあうことが出来ればと願っている」(ANT-Hiroshima 代表・渡部さん)

「自分たちのグループの活動の今後について示唆が得られた」(JOICEP 集会に参加した、(特活) ビラーンの医療と自立を支える会の会員)

「聖オルバン教会牧師から、また来年も是非研修生を招きたいとの依頼が来た。」(AHI 職員)

「日本の若者に対して、日本の今日的課題をもつ青年へのメッセージなど、各グループのニーズにあわせた話題提供ができた。」(Smile-多文化共生グループを担当したAHI 職員)

「現地の状況を生で伝えられたことから、AHI との協働を評価する声をいただいた。また次の機会を作りたい」(日進市担当職員)

## 6. 活動の課題

一日、19日間で27集会、一日平均して1.5集会という過密スケジュールになってしまった。結果として、講師が疲労してしまった。

また、集会が連続し、参加者の反応を聞き、応える、というこなしの時間、共有や交流の時間をもっと必要であった。

質問が出にくい場合。小グループで話し合う時間があるとよかった。

参加者数が思ったほど得られなかった。数年前よりも一般のイスラムへの関心が低くなっているだろうこと、広く一般の人に聞いてもらいたい時は、自分とのつながりなどを感じられる広報の仕方、会の設定(時間・場所など)に要工夫である。

## 7. 今後に向けて

長期目標にもあるように、今回受け入れてくれた27団体、そこに参加して下さった方々との相互強めいの協働事業として、二人の講師の活動するミンダナオにおける訪問や、ミンダナオ平和セミナーへの参加を進め、担い手作りに貢献したい。

平和を推進する働きを日本のNGOへの助成を通して進める貴財団に心より感謝し、平和事業を進めて上で、意義のある事業で協働したい。最後に、以下のように二人の講師のエピソードを引用させていただく。

ナプサさんの本名のNAPSALITAは当初はNAPSAだったのですが、マルコス政権のモロ虐殺キャンペーンの迫害をのがれるため、あえて、両親がクリスチャンらしく改名したそうです。お姉さんもAgaさんだったのですが、Agalinと改名しました。それほど厳しい

弾圧だったのでしょう。そのことを改めて学んだのです。

そのような中で、移民の子孫であるデデットさんのスタッフが誘拐されても、日ごろから、そして歴史的に弾圧されてきたムスリムの人々から見れば、親戚のどれかの犯罪でもあるし、そこで、犯人の情報を政府軍にもらして、逆に掃討されたら、ムスリム部族同士の紛争になるので、そこまでして、クリスチャンのワーカーを助ける義理はないというムスリムの町長や村長の反応だったとデデットはしていました。越えられない壁があるのです。ムスリム地域リーダーのアドバイスでは、誘拐した相手の家族を誘拐しかえせば、問題は解決するとアドバイスをうけたのですが、デデットさんは非暴力の立場からそれには耳をかきませんでした。

このようにフィリピンのムスリムとクリスチャンの間には歴史的、社会的にも深い溝があります。しかし、ナプサが自分の NGO であるパササンバオを立ち上げるときに、協力してくれたのは、UCCP（フィリピンキリスト教団）の教会だったそうです。UCCP は日本基督教団のようにリベラルな教会ですが、カトリック教会よりも、ムスリムとの軋轢の歴史がないぶん、そのような役割がとれるのでしょう。彼女も *In Peace* という平和のネットワークを通して、ムスリム、カトリック、プロテスタントの代表による平和づくりにも参加しています。ナプサも MILF（モロイスラム解放戦線）から誘拐される可能性があるようです。こちらは、身代金目当てなく、MILF 戦士の治療のため、看護師として働かされるためです。

この異なる立場の二人が、東京で一週間でチームメイトとしていっしょに過ごし、10 の集会で時に主となり時に従となって、互いに切磋琢磨し、学びあい、高めあい、理解しあったその姿を見て、東京における集会参加者、特に、女子学院の生徒たちは、ミンダナオにおけるクリスチャンとムスリムの共存のモデルを見出した人たちもいたのです。期せずして二人を招聘したことが、この事業をさらに豊かに、意義深いものにしたと確信しております。二人を招聘する大胆な決断ができたのも、まず、貴財団の助成金にささえられていたからにはほかありません。今後も、平和と保健に関するこのような事業を進める所存です。是非、また、パートナーとして連携できることを願っています。ありがとうございました。

資料 1. 「報告会総まとめ」

資料 2 - 1. 「デデットプレゼン資料」

資料 2 - 2. 「ナプサプレゼン資料」

資料 3. 朝日新聞記事

資料 4. 中日新聞記事

資料 5. 滋賀大学ホームページ記事（以下の URL）

<http://www.shiga-u.ac.jp/main.cgi?c=28/10/2/5/5:8>